

「地図豆」の地図を広げて街歩き

65-1 「外国人遊歩道」をたどる （距離約 10.0km）

【街歩き概要】

幕末から明治初期にかけて、在日外国人が森の中の優しい陽射しを受けて「ミシシッピーベイ（＝根岸湾）」の美しい眺望を楽しみながら遊歩したであろうに旧道に思いを馳せながら、当時の写真と地図を広げて歩く。



不動坂からシシッピーベイ（「F. ベアト幕末日本写真集」より、以下同じ）

地図豆知識：「外国人遊歩道」

幕末期、横浜在住の外国人が歩いたという「外国人遊歩道」は、横浜市中区のパンフレットにある「緑と洋館の巡り道」の元になっているもので、これは江戸幕府が外国人のために作った道路である。

当時日本に住む外国人は攘夷をとなえる浪士の襲撃を受ける危険と背中合わせだった。そんな矢先、ピクニックに行ったイギリス人が命を落とす生麦事件が起きる（1862）。これらを受けて、英仏両国公使は幕府に、山手一带に遊歩道を建設するように申し入れた。

この時かわされたのが「横浜居留地覚書」（元治元年 1864）で、その中にはミシシッピーベイ（と呼ばれることもあった根岸湾）を廻る長さ 4 マイルから 5 マイル（6km から 8km）、幅 20 フィート（6m）の馬車道を作ることがあった。

その他には、狭くなった墓地の拡張、食肉の処理場（：屠牛場、小港町辺り）、疫病を防ぐ官設種痘病院（中村町辺り）、射撃場（大和町）、競馬場も要求された（競馬場は現在の根岸森林公園）。

在日外国人は、このようにして居留地周辺で身の危険を心配することなく生活するすべを得たのである。実際の道路建設はトワンテ山（第 20 連隊が、ここに居留したことから、山手居留地 115 番・116 番、現港の見える丘公園などをトワンテ山という）に駐留する英国

隊が指揮して、一年で完成した（1866年完成）。費用は幕府が捻出したものであるが、幕府としては、ことによっては戦争に発展すること、あるいは事件を起こして多大な賠償金を支払うことを考えれば、安いものだったのかもしれない。

本来の遊歩道の場所は、山手下の元町を通って地蔵坂を上がり、根岸森林公園を抜け不動坂を下り海にそって本牧を廻り本牧から千代崎町そして桜道を通り地蔵坂へ戻るルートで坂の各所には石畳が敷かれていたといわれる。

(<http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/sighthist/midoriyokan/>などから)

その後明治9（1876）年には、もっと自由に行動したいとする外国人の声を受けて、外国人遊歩規程測量が行われる。このことについての説明は、「外国人遊歩規程標石をたどりながら小山歩き」で紹介する。

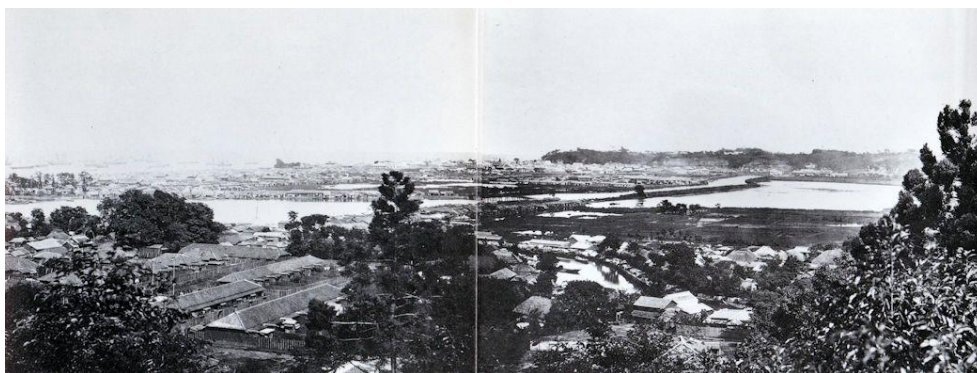


外国人遊歩道などが示された地図（「横浜近郊実測図」1871）

地図豆知識：F. ベアト（Felice Beato 1825or1832-1909）

幕末江戸を訪れた外国人にとっての日本の印象といえば「…風は静かに、空は朗らかにして、ともに四方の眺望に最も美しき色彩を添へたり。…肥えてゆたかなる小高き邸・神々しき寺々の森聳ゆるあり、いずれもみな懐かしく客を迎えるが如く、…」(シーボルト 1823 「シーボルト先生 1」 呉秀三著)、「日本ほど美しい景色に富んだ国は世界中、ほかにないと思います」(アメリカ宣教師 S.R ブラウン 1859) という好意的なものだった。

1863年?に来日し、横浜にあって、この美しい幕末日本を記録したのが、イタリア生まれのイギリス(国籍)の写真家F.ベアトである。従軍写真家であったベアトは、日本の風物や風俗にも興味を持ち各地で写真撮影を行うとともに、外交官や軍人の肖像写真を数多く撮影し販売した。そして、当時の日本人写真家・芸術家に影響を与えた。在日後半は、不動産業や貿易にもあたって財を成したが、洋銀・米相場に手を出して失敗、1884年に離日した。



野毛山から横浜市街(「F.ベアト幕末写真集」より以下同じ)

地図豆知識：横浜市域の三角測量と地図作成(再掲)

三角点設置の測量(三角測量)の最初は、明治4年に工部省がイギリス人測量長マクヴィーン(C. A. Mcvean 1838-1912)の指導を受けて開始した東京府下三角測量である。その、マクヴィーンは、明治最初のお雇い外国人の一人であって、日本燈台の父、横浜まちづくりの父として知られるブラントン(Richard Henry Brunton 1841-1901)の助手として、明治元年(1868年8月)に来日した。

マクヴィーンが指導した東京府下の三角測量は、明治8年(1875)には内務省地理寮の所管となって「関八州大三角測量」へと拡大される。その後、「全国測量」と改称して南東北から近畿地方にまで広げられる。

さらに、明治17年からは陸軍参謀本部測量局(国土地理院の前身)が、この測量を引き継ぐ形で一等三角測量を開始し、現在に至る。しかし、内務省測量の成果は、ごく一部を除き利用されなかった。

また、これらと相前後して、明治7年(1874)以降には、大阪・京都そして5港(函館、新潟、横浜、神戸、長崎)6鎮台(仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本)といった主要

都市でも測量が実施され、測量標石もいくらか設置されたようである。

横浜では、明治7年～明治8年に地図作成の骨格となる三角測量及び水準測量が行われ、明治14年(1881)には内務省地理局から五千分の一「横濱實測圖」が発行された。同図には、凡号水準点の記載があり、いくらか発見されている。同図は、明治期横浜を知る貴重な大縮尺図である。

さらに、横浜市では、1921(大正10)年から「三千分一地形図」作成の測量に着手し、その後関東大震災により一時作成を中断するが、ほぼ計画的に整備がすすめられた。

同図は、現在横浜市のサイトで公開されていて、大正期、昭和初期の横浜を容易に知ることができる。



「横濱實測圖」表題

【道順】

石川町駅→濡れ地蔵→地蔵坂(・乙女坂)→山手通り・山元町交差点から打越橋→山元町簗沢入り口交差点・中華墓地地蔵王廟→根岸森林公園・根岸競馬場観覧席跡・馬の博物館→根岸旭台交差点・ドルフィン→不動坂・ミシシッピーベイ展望→白瀧不動尊→七曲り坂→池袋公園・アメリカ坂→本牧山頂公園→千代崎川跡→射撃場(鉄砲場)跡→山手駅(or山手トンネルから石川町駅)

【街歩き解説】

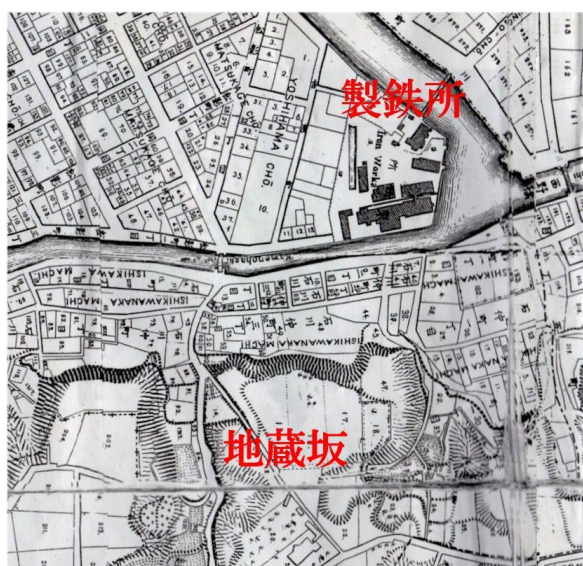
①地蔵坂

JR 根岸線石川町駅を西へでて、亀の橋のたもとに出る。橋際に「濡れ地蔵」がある。そのことから、南へ上る坂を「地蔵坂」という。

もとは、坂の途中にあったのだが関東大震災で倒壊し、現在の位置に修復、再興されたという。

その地蔵坂を上り、ベアト写真にある最初の撮影ポイントを探し往時を思い浮かべる。

地蔵坂右手（西側）の高台には、「横浜女学院」、「横浜共立学園」などがある。そこへ向かう坂道は、中高生たちの通学路にあたることから「乙女坂」と呼ばれている。



地藏坂附近（五千分の一「横浜實測圖」M14年に文字補入）



地藏坂下から富士山方向と濡れ地蔵



かつては横浜の町並みの向こうに海も見えていた地藏坂からの眺め

②山元町へ

最初の撮影ポイント（上写真）を探しあてたら、乙女坂を上って女学校の建物を眺めつつ打越橋から山元町交差点に出る。そのとき、少し寄り道をして、打越橋の北へ出た清水坂途中には、安政年間に外国船に供給したという霊泉（由来碑）がある。この泉は関東大震災の際にも役立ったという。

あるいは乙女坂には向かわず地藏坂をそのまま上り切り、山手本通り（外国人遊歩道の道筋）を西に進んで山元町交差点へと進む。



打越橋

山元町商店街はレトロな雰囲気があり、高齢者なら辺りを歩くだけで子ども時代のことが思い出されるだろう。

その後、箕沢入口交差点を西へ出て大芝台に向かい、1892年（明治25年）に造られたという、独特の雰囲気がある地藏王廟を見る。これは、現存する横浜市内近代的建築物としては最古のもので、当時の横浜在住華商による寄金によって建築された、中国人のための墓地である。台湾や広東省によく見られる形式だという独特の建物や墓碑などの細部をよく観察すると、日本人墓地との違いを感じて楽しめるだろう。地藏王廟の大芝台の北の高

まりには寺町が広がる。



地蔵王廟

③根岸競馬場跡

再び、山手本通り（外国人遊歩道の道筋）に戻り根岸森林公園へと向かう。

根岸森林公園は、楕円形の形状になって根岸台の丘に広がっている。そこはかつて、根岸競馬場だった。あの「横浜居留地覚書」（元治元年 1864）によって、外国人遊歩道とともに要求・建築された競馬場である。

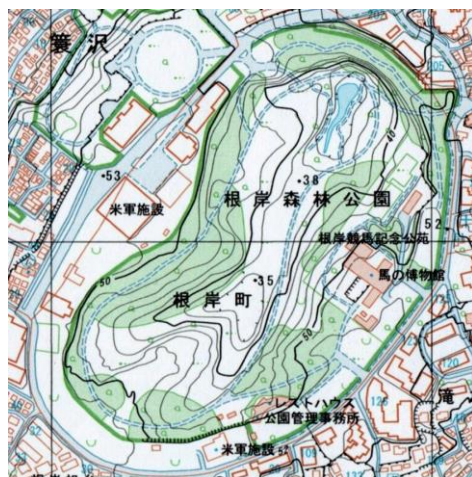
ここで、日本で初の洋式競馬が行われたのは、1867年（慶応3年）のことだったという。外国人クラブの主催で始まった競馬は、その後1880年（明治13年）に日本競馬クラブの運営に引き継がれ、1943年（昭和18年）には日本海軍に接收された。

そして、今も公園に隣接して米軍施設が残るように、戦後は米軍に接收されてゴルフ場などに使用されていたが、1969年に一部を除いて接收解除され、跡地を横浜市が公園として整備、1977年根岸森林公園となった。



根岸競馬場

(「横浜近郊実測図」1871・「横濱實測圖」M14年(1881)に文字補入)



根岸森林公園附近 (1/10,000 地形図「関内」H17年修正)



一等馬見所の建物と広場にある観覧席などの解説写真



馬の博物館

現在、競馬場残る遺構は、一等馬見所の建物が残されている。この建物は J. H. モーガンの設計によるものである。J. H. モーガンは米国ニューヨーク州生まれの建築家で、1920 年（大正 9 年）に来日、特に横浜では多くの作品を手がけている。横浜山手に残るペーリックホールや山手 111 番館が彼の設計によるものである。

建物はフェンスで囲まれて立ち入りはできないが、蔦の絡んだ堂々とした外観を間近に見ることができる。また、北側の広場には、競馬場についての解説などがあって、内部のようすを知ることができる。また、競馬に関連した施設として、「馬の博物館」や「ポニーセンター」などが設けられている。

さらに特徴的なことは、コースの内側にかつての地形がそのまま残っていることである。私の知識の範囲では、かつて地方競馬場の一部では、コース内側を開場以前のまま耕作地などとして使用する例があった。根岸競馬場の過去の地図を広げて見ると、谷間に広がる田や畑、そして道路すら場内を横断していて、こうした例に近い状態であったことが読み取れる。その後のゴルフ場も、さらに森林公園もそのまま改変されなかったから、園内では自然に近い傾斜のある地形が楽しめる。



米軍の第五消防署と「ドルフィン」

④不動坂と白瀧不動尊

公園の外縁部南の道脇に、白地に赤く「FIRE STATION No. 5」とある米軍の第五消防署が建っている。根岸森林公園周辺には、ここだけでなく米軍施設がまだいくらか残っていて、ちょっと見に異国に来たかと思う。

消防署前の交差点を南へ出て、坂道を下りる。不動坂である。近くには 1974 年に松任谷由実（当時は「荒井由実」）が発表したアルバム「MISSLIM」の収録曲「海を見ていた午後」の歌詞の中に登場する「ドルフィン」がある。店内からの眺めは、それほど期待できないが、店内には有名人のサイン入りの皿などが並ぶ。

U の字になった坂道を下った場所に、「横浜手彩色絵葉書」や「F. ペアト幕末写真集」に残っている本牧湾を望む地点がある。ここからは、正面に三之谷と本牧岬の景観が広がり、

その向こうには遠く房総半島が見えて絶景の地、外国人遊歩道の中でも人気のビューポイントだった。

その地点を、古い写真を手にして探してみる。きっと、「ああ、ここだ！」と見つかるだろう。

ただし、ベアトの写真には、崖下の東西にのびる遊歩道の右手には磯子の村々の家並みと本牧海岸があったのだが、今ではどこまでも埋め立てられて工場地帯が広がり、その面影は遠い昔のものになっている。

もちろん、坂下には地名のもとになっている白瀧不動尊があつて、ここでも新旧の地図やベアトの写真と現在の風景を見比べる。石段の両側にある高木、そして一筋になった小さな不動滝やお堂も当時のままなのだろうか？と。



いずれも不動坂から根岸湾（右）



現在の不動坂



不動坂下の白瀧不動尊と本牧の並木道



現在の白瀧不動尊の石段と不動滝



不動坂附近

(五千分の一「横濱實測圖」M14年に文字補入・1/10,000地形図「根岸」H17年修正)

⑤池袋公園からアメリカ坂上へ

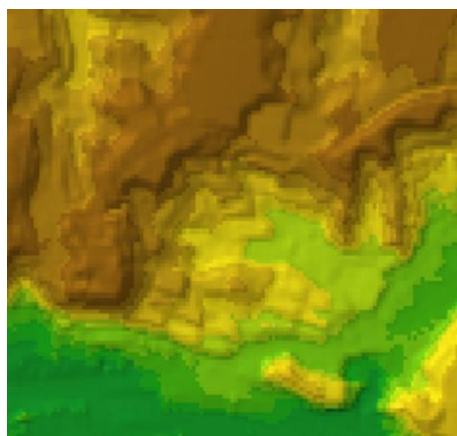
白瀧不動尊から先の外国人遊歩道は、坂を下り切ってから海岸に沿って本牧を廻り、千代崎町そして桜道を通り地藏坂へ戻るルートであった。しかし、旧海岸沿いの道はすっかり開発されて面影を失っていることが予想されるから、台地上を七曲り坂、池袋公園、アメリカ坂とたどって本牧山頂公園へと向かう。

台地上と旧本牧海岸の間にある海食崖には、（根岸加曾台）七曲り坂に代表されるような特徴的な坂道があって、坂好きにはたまらない場所である。じっさい、同坂は本牧の工場地帯を望む夜景スポットとなっている。

その先の台地上は、住居表示によって池袋と呼ばれているが、地図で明らかなように東京池袋と同じように袋状になった台地下の地形からつけられた地名と思われる。本牧と連なるアメリカ坂は、あたりが米軍の住宅地だったことからつけられた。



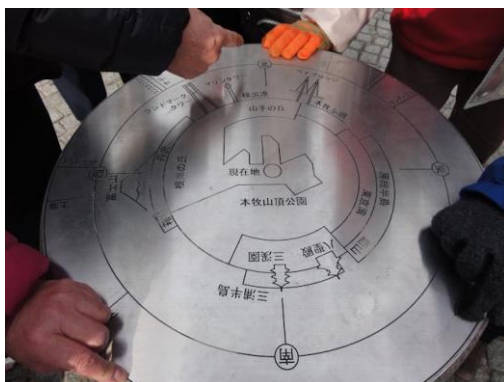
白瀧不動尊の東にある（無名？）坂と七曲り坂



袋状の地形が明らかな池袋付近（1/10,000 地形図とデジタル標高データ）

⑥本牧山頂公園

丘上にへばりつくように森林が残された本牧山頂公園は、米軍横浜海浜住宅地区であったものが返還されて整備されたものである。公園内には、広場のほか三浦半島はもちろん富士山や房総半島まで望むことができる人工の高まり「和田山」がある。



和田山で

⑦千代崎川跡へ

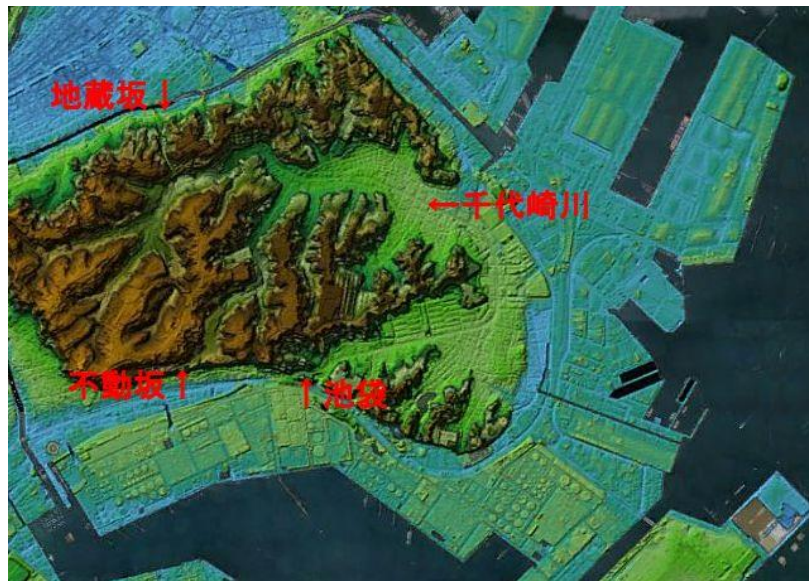


本牧町で

しばし公園内を散策したのちは、本牧山頂公園レストハウスの東から北へ出て本牧町、千代崎川跡へと向かう。道すがら、由緒ありそうな家の門や蔵に出会って、ほっとする。千代崎川は、根岸の丘陵地帯からの水を集めるよう流下して東京湾に注いでいたものだが、今ではそのほとんどが暗渠化されている。裏通りになった川跡の道には、橋柱などを見つけることができる。



千代崎川跡（地図から、どのあたりが千代崎川跡であるかは、すぐわかるはずだ）



根岸台のデジタル標高地図

（千代崎川は、根岸の丘陵全体を流域とすることが明らかだ）



千代崎川跡

⑧鉄砲場（射撃場）跡

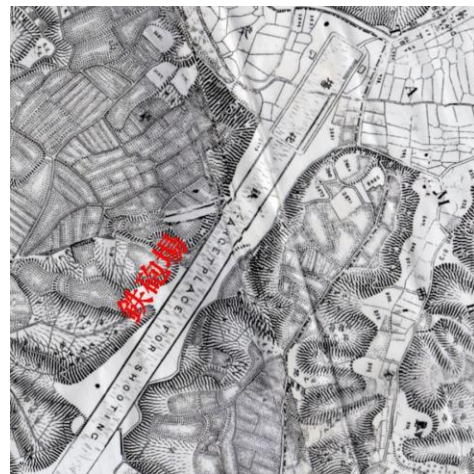
千代崎川の跡をたどっているうちに、山手駅へとどこまでも直線的に伸びる大和（やまと）町商店街に出会うだろう。

そこは、「横浜居留地覚書」（元治元年 1864）にあった外国人射撃場（鉄砲場と呼ばれた）跡である。この射撃場はイギリスの工兵隊の手で整備され、1887（明治20）年ころには日本政府に移管されたのち県が管理し、その後個人に払い下げられたのだという。払い下げを受けたのが、日本で初めてワイシャツを製造した石川清右衛門で、店名を「大和屋」といった。そのことから、「大和町」と呼ばれるようになったという。

直線的な街並みのほかに射撃場を表現するものには出会えないが、どこか懐かしい商店街を進んで街歩きを終える。

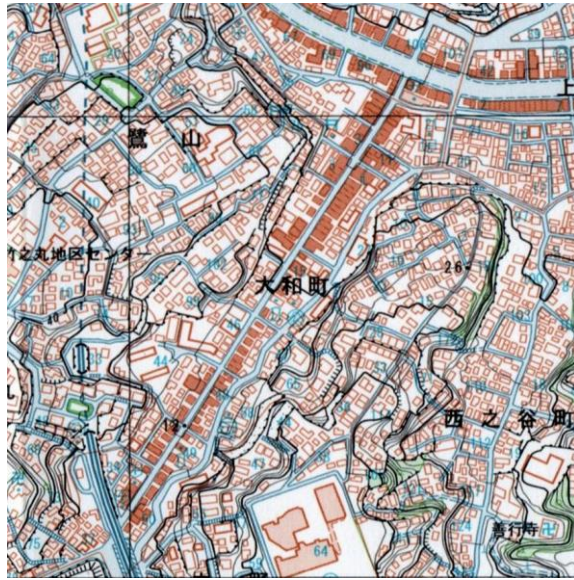


大和町商店街と鉄砲場（射撃場）跡



鉄砲場（射撃場）附近

（「横浜近郊実測図」1871・「横浜實測圖」M14年（1881）に文字補入）



大和町附近 (1/10,000 地形図「関内」H17年修正)



大和町商店街、銭湯「いなり湯」の壁にあったもの
(番台から三助さんと呼ぶ時に、男湯はこの拍子木を一回、女湯は二回打ったという)



「迅速測図」に外国人遊歩道入れたものの
(「神奈川縣武蔵国久良岐郡横濱区」明治15年 参謀本部)

**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****